

小南 悠

縁の垂れた帽子

—*Moby-Dick* における帽子表象

1. はじめに

批

評家 Harold Beaver が膨大な註を付したことで知られる、*Moby-Dick* (1851) の Penguin 版 (1972 年初版) カバーアートに採用された絵画 “The Sperm Whale in a Flurry” (1840) を仔細に眺めてみるならば、そこには、もつれた縄によって抹香鯨の身体に縛り付けられ、おそらくは息絶えているのであろう、1 人の捕鯨船員の姿が見出される。そして、さらに注視すれば、この船員の被っていた帽子が今まさに取れ、水中へ没しようとしている様もまた、はっきりと見て取れよう。画家 Ambroise Louis Garneray (1783-1857) が描いたこの絵が示すように、捕鯨の场景を描いた数多くの絵画には、鯨と奮闘する捕鯨船員たちの雄姿のみならず、彼らの所持する帽子が描き込まれてきた。それは、持ち主を離れて波間を漂っているものもあれば、鯨との格闘の中で宙を舞っているものもある。絵画におけるそうした帽子描写は、静止画の中に動きを取り込む役割を果たすとともに、19 世紀の捕鯨船員たちが実際に帽子を被って捕鯨に従事していたことを如実に物語ってくれる。

捕鯨小説という性質上、Herman Melville (1819-91) がものした *Moby-Dick* においても、作品の至る所に帽子にまつわる描写がちりばめられている。Eugene F. Irey が編纂した *A Concordance to Herman Melville's Moby-Dick* (1982) を紐解けば、作中で、「水夫の防水帽」を表す “tarpaulin” という単語と、「(縁なし) 帽子」を意味する “cap” という単語は、ともに 5 回、そして「(縁あり) 帽子」を指す “hat” の語に至っては、延べ 37 回にわたって用いられていることがわかる (Irey 215, 693, 1627)。Melville の筆は、帽子という小道具を執拗なまでに描き続けたと言えよう。しかし、そもそも

2 小南 悠

Melville が、人物の装束描写に紙幅をそれほど費やさぬ作家であることを思い起こしてみるならば、帽子という衣類にまつわる描写のこの例外的な反復は、殊更、示唆的である。ゆえに、この作品においては、「帽子固執が強く、つねになんらかのシンボルになっている」という坂下昇の指摘は鋭い（坂下 325）。しかし、坂下は、度重なる帽子描写に一応の重要性を見出してはいるものの、それが具体的にいかなる有意性を作品に与えているのかについては、口を閉ざす。そして、*Moby-Dick* 批評史において、坂下を除けば、反復される帽子描写に意義を見出した論考を、筆者は寡聞にして知らない。

したがって、本稿では、作中の帽子描写——とりわけ Ahab の帽子描写——を、反復性という観点から辿りつつ、そこに、ある種の矛盾が露呈していることを指摘する。そうしたうえで、*Moby-Dick* という物語において反復される帽子描写と、そこに見出されるひとつの矛盾が果たす機能の一端を詳らかにしてみたい。

2. Ahab の帽子

帽子に関して計 47 箇所もの言及が散見される *Moby-Dick* だが、その中でもとりわけ、Pequod 号の船長 Ahab の帽子にまつわる描写が際立って多いことは、特筆に値するだろう。第 30 章 “The Pipe” において、読者は初めて、帽子を被る Ahab の姿を目の当たりにする。

He [Ahab] tossed the still lighted pipe into the sea. The fire hissed in the waves; the same instant the ship shot by the bubble the sinking pipe made. *With slouched hat*, Ahab lurchingly paced the planks. (130; italics mine)¹

甲板に置かれた腰掛けに坐し、Ahab はパイプを燻らせる。やがて彼は、パイプのような慰み物は要らぬと判断し、それを海へと投げ捨て、おぼつかぬ足取りで甲板を歩いていく。語り手は、そのような状況描写の中に “With slouched hat” という前置詞句を挿入することで、Ahab の帽子に言及する。ここではひとまず、“hat” という名詞が、「帽子の縁を垂らす (to hang down)」という語義の動詞 “slouch” の過去分詞形によって修飾されていることを確認しておきたい (*OED*, “slouch,” def. v. 1. c)。Ahab の帽子に

関して、これと同様の表現が、第36章“The Quarter-Deck”にも見受けられる。

With bent head and *half-slouched hat* he [Ahab] continued to pace, unmindful of the wondering whispering among the men; till Stubb cautiously whispered to Flask, that Ahab must have summoned them there for the purpose of witnessing a pedestrian feat. (161; italics mine)

この引用部においても、帽子を被る Ahab の姿が窺われるが、何より注目したいのは、ここでも再び、“slouch”という動詞の過去分詞形が Ahab の帽子を形容している点である。これらの引用が示すように、Ahab にまつわる描写の中では、“slouch”と“hat”という2語が連動する形で、繰り返し用いられているのだ。縁を垂らしたこの帽子について、酒本雅之は、明晰な真理に辿り着こうとする身の程知らずな Ahab の後ろめたさが表れているとし（酒本、『沙漠の海』223）、David Park Williams は、この帽子こそ“symbol of his [Ahab’s] defiance of God”であると看破する（Williams 484）。Ahab はしばしば太陽を神として捉えるが、そうした文脈においてみると、帽子の縁を垂らす動作はすなわち、神から自らの眼を覆い隠す所作となる。そうした意味で、縁の垂れた帽子は、Ahab にうってつけの小道具であると言えるだろう。Ahab の帽子は、神への反抗心に満ちた彼の内面を象っているのだ。

だからこそ、第130章において、白鯨の出現を期待して昼夜見張りに立つ Ahab の描写にも、同様の表現が用いられる。

Nor, at any time, by night or day could the mariners now step upon the deck, unless Ahab was before them; either standing in his pivot-hole, or exactly pacing the planks between two undeviating limits, — the main-mast and the mizen; or else they saw him standing in the cabin-scuttle, — his living foot advanced upon the deck, as if to step; *his hat slouched heavily over his eyes*; so that however motionless he stood, however the days and nights were added on, that he had not swung in his hammock; yet hidden beneath *that slouching hat*, they could never tell unerringly whether, for all

4 小南 悠

this, his eyes were really closed at times. . . (537; italics mine)

物語の終盤、憎き白鯨を発見せんがため、Ahabは船長室には戻らず、四六時中、海へ監視の目を光らせる。先に挙げた引用部と同様に、ここでも、“slouch”と“hat”という語の組み合わせが用いられている。それに加え、ここでは、同じ段落の中に2度も、この組み合わせが反復されている。Ahabを描く場面において、Melvilleの筆は、執拗なほどに彼の縁の垂れた帽子を描き出すのだ。

古代から近代に至る帽子表象を論じた内村理奈は、「頭部は生命の宿る場であり、そこを覆ったり飾ったりするものは人格そのものを表象」と指摘するが（内村 160）、Ahabが被る縁の垂れた帽子もまた、彼の内的特性を、ひめやかに、しかし実に雄弁に、物語っているのだ。思い返せば、第37章“Sunset”において、Ahabは自らが“Iron Crown of Lombardy”を戴いていると独白する（167）。皇帝の証であるこの冠は、Christの磔刑に用いられた釘を叩き伸ばして作製されたというが、だからこそ、船上の絶対的支配者であり、かつ、全人類が抱いた憎悪をその胸中に集積する苦難者たるAhabにこそ、この冠は相応しい。その意味で、この鉄冠はAhabの人物像を巧みに表象している。*Moby-Dick*において、頭部装身具は、それを身に着ける者の象徴的記号となるのだ。

Ahabの帽子が作中で重要なシンボルとして機能していることは、第130章がそのものずばり“The Hat”と題されていることから窺えよう。しかし、これまで繰り返されてきたAhabの帽子描写は、その第130章において、次のような幕切れを迎える。

“Your hat, your hat, sir!” suddenly cried the Sicilian seaman. . . .

But already the sable wing was before the old man’s eyes; the long hooked bill at his head: with a scream, the black hawk darted away with his prize.

An eagle flew thrice round Tarquin’s head, removing his cap to replace it, and thereupon Tanaquil, his wife, declared that Tarquin would be king of Rome. But only by the replacing of the cap was that omen accounted good. *Ahab’s hat was never restored*; the wild hawk flew on and on with it; far in advance of the prow: and at last disappeared; while from the point of that

disappearance, a minute black spot was dimly discerned, falling from that vast height into the sea. (539; italics mine)

ここにおいて、Ahab は Rome 王 Tarquin と比較される。しかしながら、Tarquin の帽子とは異なり、Ahab の帽子は 2 度と持ち主の元へ戻りはしなかったという。そうして語り手は、Ahab の帽子喪失を、吉兆とみなされた Tarquin の逸話とは対照的に、不吉な予兆として捉える。この場面に関して、Dorothee Metlitsky Finkelstein は、“the symbolical identification of cap and crown is self-evident” としたうえで、“the removal of his [Ahab’s] ‘crown’ was final and therefore disastrous” だと指摘する (Finkelstein 201)。たしかに、この帽子喪失に示唆される不吉な予兆が、のちの Ahab の破滅に接続するということは、John W. Rathbun などの批評家も指摘するとおりである (Rathbun 3; Robillard 98)。すなわち、Ahab の帽子喪失が、第 135 章で Ahab 自身に降りかかる破滅を読者に予感させる。そのような仕掛けになっているということだ。

しかしながら、第 130 章で描かれるこの帽子落下の場面を読み、さらにその先を読み進める読者は、ある矛盾に突き当たる。第 132 章 “The Symphony” における “From beneath his slouched hat Ahab dropped a tear into the sea; nor did all the Pacific contain such wealth as that one wee drop” (543) という描写を読むとき、読者は再び、縁の垂れた帽子を被る Ahab の姿を目の当たりにするからだ。復讐に燃える Ahab が大洋に落泪するこの章は、*Moby-Dick* という小説の中で最も美しい章のひとつに数えられるだろう。ゆえに、Ahab が涙するこの場面の叙情性に読者は惹き付けられるところであるが、今ここで注目すべきは、涙する Ahab の描写に、“From beneath his slouched hat” という前置詞句が付与されている点である。Ahab は帽子——それも縁の垂れた帽子——をまたもや被っているのだ。加えて、第 133 章 “The Chase — First Day” においても、白鯨追跡を終えて船の甲板を歩く Ahab は、“his slouched hat” を被っていると描かれる (553)。そして、同章の最後でも、昇降口に立って見張りを続ける Ahab の描写に “slouching his hat” という分詞構文が挿入される (554)。語り手は、第 132 章と第 133 章においても、縁の垂れた Ahab の帽子に繰り返し言及する。

第 130 章において、“Ahab’s hat was never restored” とされ、そのことが不

6 小南 悠

吉な予兆として語られていたにもかかわらず、第 132 章と第 133 章では、まるで何事もなかったかのように、縁の垂れた帽子を被る Ahab の姿が、克明に、繰り返し、描かれているのだ。ここで、先に引用した帽子喪失の場面において“restore”という語が用いられていることに、注意を払ってもよいだろう。*The Oxford English Dictionary* に拠ると、“restore”という動詞には勿論、「元に戻す (to give back)」という意味もあるが (*OED*, “restore,” def. v. 1), 「テキストに挿入する (to replace or insert in a text)」という語義もある (*OED*, “restore,” def. v. I. 6. c)。したがって、“Ahab’s hat was never restored”という表現は、「Ahab の帽子は 2 度とテキストに挿入されなかった」と読み替えることも可能だろう。しかし、永遠に失われたはずの Ahab の帽子は、その後も *Moby-Dick* というテキストに挿入され続け、繰り返し彼の頭上に現れ続ける。この事実を、読者はどう捉えるべきなのか。

第 130 章で永遠に失われたはずの帽子がその後も Ahab の頭上に繰り返し描かれる事実を論理的に説明しようとするならば、いくつかの説が考えられる。第 1 に、Ahab が複数個の帽子を所持していた、という可能性があるだろう。つまり、第 130 章において Ahab が被っていた帽子はたしかに失われたが、第 132 章以降、Ahab はあらかじめ所持していた帽子の代替品を被っているという仮説である。しかし、“The Hat”と題した章を設け、その中で帽子喪失を吉な予兆として描いた語り手あるいは作者が、その後の章において、結果的に予兆の効力を薄めてしまう危険性を顧みず、Ahab に替えの帽子を被らせるとは考え難い。また、第 130 章において Ahab の帽子が“Ahab’s hat”と言い表されていることにも留意したい。失われた帽子が Ahab の所持する複数個のうちのひとつであるならば、“the hat of Ahab’s”と定冠詞を付すか、“one of Ahab’s hats”として複数あるうちのひとつであることを明確化するように思われる。しかし、“Ahab’s hat”と表現されている以上、Ahab の帽子はこれひとつであると考えべきだろう。だからこそ、第 130 章で失われた帽子が、Ahab の数ある帽子の中のひとつであったとは、どうにも考えにくい。

第 2 に、語り手あるいは作者が、第 130 章における帽子落下の描写を失念したまま、第 132 章以降を執筆したという可能性も考えられる。あるいは、第 132 章以降を先に執筆し、その後で帽子落下のくだりを第 130 章に書き加え、そのまま辻褃合わせを忘れていた、という可能性もあるだろう。

どちらにせよ、帽子にまつわる矛盾は、語り手あるいは作者の手落ちなのではないか、ということである。たしかに、そう考えてみるならば、*Moby-Dick*は数多くの矛盾を内包している。例えば、Pequod号の舵の形は、ある場面では舵輪とされている一方、別の場面では舵柄と表記されているし、航海士 Stubb の階級が、ある箇所では二等航海士とされているにもかかわらず、別の箇所では三等航海士と記されている (Chase 94)。また、Ishmael と Queequeg の親密な関係性が後付けされたがために、物語全体において Queequeg の扱いに一貫性が見られない事実を思い起こしてもよいだろう (Hayford 40-41, 46-63)。加えて、Ahab の足に対して“foot”という単語の複数形“feet”が用いられている箇所があり、その場面ではあたかも Ahab の義足設定がなかったかのように描かれているなど (Hayford, Parker, and Tanselle 883)、この作品が数多の矛盾を孕んでいることは間違いない。Ahab の帽子にまつわる矛盾に関しても、The Northwestern-Newberry 版の編者は、“It seems an oversight on Melville’s part to allow Ahab another ‘slouched hat’ here”として、断定を避けつつも一応の結論を出している (Hayford, Parker, and Tanselle 902)。しかしながら、第 130 章で描かれている印象的な帽子喪失のくだりを、語り手あるいは作者が忘れていたとは到底考えられないし、第 132 章以降で 3 度にわたって Ahab の帽子が描かれていることから、Melville 自身の推敲や出版社側の校正の段階で、誰ひとりこの矛盾に気付かなかった可能性は極めて低い。² 何より、先に述べたように、作中では“slouch”と“hat”の語の組み合わせが反復されることで、明らかに、読者の意識を Ahab の帽子に引き付けようとする仕掛けが施されている。また、Melville は鳥に帽子を奪われるという設定によほど執着があったらしく、のちの長詩 *Clarel* (1876) においても禿鷲が帽子を奪い去る場面を描いている (酒本、「メルヴィル演習」14)。したがって、作者のこだわりさえ感じさせる帽子描写に関する矛盾を、単なる“an oversight”として一蹴してもよいのだろうか。

そうであるならば、残る可能性は、語り手あるいは作者が、敢えて矛盾を含ませたというものであろう。無論、現代の読者に真相を確かめる術はないが、出版前に校正を経ていること、帽子描写の際に同じ単語の組み合わせが反復されていることも踏まえると、永遠に失われたはずの Ahab の帽子がその後も描かれ続けるという矛盾は、意図的に仕組まれたものであ

ると見なすべきではないか。だとすれば、そのような矛盾を取えてテキストに仕掛けた Melville の意図は、一体どこにあったのか。第 130 章を読んだ読者の脳裏には、Ahab の帽子が鷹に奪われ海中へ没する様子がしかと刻まれることになるだろう。そうしたうえで、物語を読み進める読者は、第 132 章と第 133 章において、海へ落ちたはずの帽子が Ahab の頭上にある様を再び目撃する。だからこそ、Ahab の帽子と落下という現象を意識下において連想的に結び付けている読者が、Ahab の頭上に描かれた帽子を再度目の当たりにした時、そこには、落下という運動がサブリミナルに重ねられるのではないか。そのとき、1 度失われた帽子が再び落下するのではないかというある種の予感が、読者を捕らえる。そうした予兆的意識を作り出すために、縁の垂れた帽子は Ahab の頭上に描かれ続けるのではないか。

3. Ahab, あるいは落下する帽子

今、予兆という言葉を用いたが、いみじくも E. M. Forster は、自らの著書の 1 章分を“Prophecy”と題し、その中で“The essential in *Moby Dick*, its prophetic song, flows athwart the action and the surface morality like an undercurrent”と看破した (Forster 95)。あるいは、“The frequency of dramatic omens is also skillfully increased as the climax approaches”という F. O. Matthiessen の言葉や (Matthiessen 420), “The pattern of destiny seems to unfold itself in signs and portents at every stage of the way”という Harry Levin の指摘を思い出してもよいだろう (Levin 165)。彼らの言うように、*Moby-Dick* が予言や予兆と不可分の関係にあることはたしかである。Ishmael や Ahab の名がそれぞれ旧約聖書由来のものであることから、予言や予兆、そしてそれらの成就に満ちた、ある種の予型論的構造を *Moby-Dick* のうちに見出すことも可能だろう。だからこそ、第 134 章“The Chase — Second Day”で起こる船員 Fedallah の死は、Ahab にまつわる彼自身の予言と相まって、疑いなくひとつの予兆となっている。Ahab が配下として傍に置く Fedallah は、第 134 章において、Ahab の縄に絡まり、そのまま白鯨によって海中へ引きずり込まれ息絶える。海に引きずり込まれるそのような Fedallah の死が、続く第 135 章における Ahab の死の予兆として機能していることは明白である。縄による死が、Fedallah から Ahab へと移し替えられているとも言

えるだろう。

予兆といえば、第9章“The Sermon”で展開する Jonah の物語も注目に値する。旧約聖書において、Jonah は神を恐れ、船に乗って神の目からの逃避を企てるが、船から追放された彼は巨大な鯨に呑み込まれる。Mapple 牧師は、旧約聖書における Jonah の物語をそのように詳述するのだが、神から逃れようとする Jonah は“slouched hat”を被っているのだと付言する(43)。言わずもがな、“slouch”と“hat”の語は、Ahab の帽子描写を彷彿とさせる。帽子に表れる Ahab の神への反抗は、同じく帽子の縁を垂らす Jonah の背神を原型としているのだろう。ゆえに、Jonah は Ahab の予型として描かれていると酒本は指摘するが(酒本、『沙漠の海』223)、たしかに、神から逃れようとした罰として鯨に襲われる Jonah の運命に対し、Ahab の破滅はその対型となっている。Jonah から引き継ぐかのように、Ahab は鯨に襲われるという禍災に見舞われるのだ。

Jonah と Ahab は、縁の垂れた帽子という共通項で結ばれるが、作中で帽子を被っているのは彼らだけではない。例えば、第48章では、航海士 Flask が自らの帽子を脱ぎ、それを踏みつけて海へ投げ捨てる場面がある(222-23)。第87章においては、鯨の大群に包囲された Pequod 号の乗組員たちがその群れから抜け出す際、Queequeg の被っていた帽子が海へ落下する(390)。第121章には、Stubb の被る帽子が風に攫われ、船外へ飛ばされていく描写が見て取れる(511)。このように、物語内では、水夫たちの帽子が度々描かれ、しかも、それらが海へ落ちていく描写が反復される。これらの度重なる帽子の落下が、最終的には Ahab の帽子落下へと収斂するのだと Beaver が指摘しているように(Beaver 947)、反復される帽子の落下は、第130章における Ahab の帽子落下の予兆として機能しているのだろう。Beaver の指摘に信を置くならば、帽子の落下という現象が、Flask, Queequeg, そして Stubb から、最終的に Ahab へと移されていくのだ。

縄による死、神に背いたがゆえに鯨に襲われるという禍難、そして帽子の落下など、*Moby-Dick* においては、あらゆる予兆が最終的に Ahab そのひとへと収束していく。“Doom gathers about him [Ahab] like a net”と看破したのは Howard P. Vincent であったが(Vincent 375)、彼の言うように、この物語では、あらゆる予兆が Ahab に移し替えられていくという力学が働いている。不吉性を帯びた現象は予型となり、Ahab はそれらを一挙に引

10 小南 悠

き受ける対型となるのだ。

さて、本論前半で取り上げた Ahab の帽子描写に立ち戻りたい。第 130 章で鷹によって永遠に失われたはずの Ahab の帽子が、第 132 章と第 133 章においても描かれ続けるということは先に述べた。その次の章、すなわち第 134 章は、このように結ばれる。

Meantime, of the broken keel of Ahab's wrecked craft the carpenter made him another leg; while still as on the night before, *slouched* Ahab stood fixed within his scuttle; his hid, heliotrope glance anticipatngly gone backward on its dial; set due eastward for the earliest sun. (562; italics mine)

これは、2 日目の白鯨追跡を終えた Pequod 号上の様子を描いた一幕であるが、ここにおいて Ahab は、“slouched” という語で形容されている。たしかに、“slouch” という語には「頭や肩を垂らす (to droop the head and shoulders)」という語義もあり (OED, “slouch,” def. v. 1. b), その過去分詞形 “slouched” は現在分詞形 “slouching” と同等の意味を表すことから (OED, “slouched,” def. adj. 2), この “slouched Ahab” という表現は、「頭を垂らした」あるいは「肩を落とした」Ahab の姿を言い表しているとも読めるだろう。しかしながら、これまで見てきたように、*Moby-Dick* という小説において、“slouch” という語は常に “hat” の語と連動して用いられていることを思い起こすべきだろう。³ 具体的には、この語は、この場面を除けば、“hat” という名詞を修飾する分詞の形で用いられているか、“hat” を主語とする動詞として用いられているか、または、“hat” を目的語とする動詞として用いられているかのいずれかである。それにもかかわらず、第 134 章のこの場面では、“slouch” という動詞が過去分詞の形で、Ahab という人間そのものを修飾している。換言すれば、ここでは、Ahab が “slouch” という動詞の目的語となり、Ahab 自身がまるで縁の垂れた帽子であるかのように描かれているのだ。あるいは、“slouch” という語を介して、Ahab と帽子が重なり合う、そうした読みの可能性へと読者を誘う仕掛けが施されているとも言えるだろう。すなわち、ここにおいて、Ahab の〈帽子化〉とでも言うべき現象が起きているのだ。

第 130 章を読んだ読者の意識下では、Ahab の帽子が落下という運動と

強く結び付けられる。そして、続く第 132 章と第 133 章において、失われたはずの Ahab の帽子を再度目の当たりにする読者は、落下という運動をサブリミナルに思い起こさせられる。そして、落下運動が意識下に伏在する読者の眼前で、続く第 134 章において、Ahab そのひとが、縁の垂れた帽子と化するのだ。そうしたうえで、海へ落ちるという動作の主体が、縁の垂れた帽子から Ahab へと横滑りする。Ahab に収束していく不吉な予兆のひとつとして、縁の垂れた帽子の落下運動もまた、第 135 章で白鯨によって深海へ引きずり込まれる Ahab へと移し替えられていくのだ。あるいは、第 130 章で展開される帽子の落下は、Ahab 自身の落下の予型として機能していると言ってもよい。執拗なまでの“slouch”と“hat”の語の反復が、そのことを物語っているのだ。そして、繰り返される落下の運動性は、Ahab が Pequod 号そのものに重ねられる描写を踏まえるならば、最終的に、大渦巻に呑み込まれてゆく Pequod 号の物理的運動性へと収斂していくのだ。

4. おわりに

そもそも、物語の幕開けにおいて、語り手は自らが船乗りになった動機を次のように開陳する。

... whenever I find myself involuntarily pausing before coffin warehouses, and bringing up the rear of every funeral I meet; and especially whenever my hypos get such an upper hand of me, that it requires a strong moral principle to prevent me from deliberately stepping into the street, and methodically *knocking people's hats off*— then, I account it high time to get to sea as soon as I can. (3; italics mine)

心気症に苛まれ、自制心を働かせなければ人々の帽子を叩き落としたくなる、そういった時はすぐ海へ行かねばなるまいと、語り手は言う。ここで言及される“people's hats”とは紳士の印であり、文明社会で威力を振るう金銭というものへの語り手なりの反発意識が窺えると、牧野有通は指摘する（牧野 161）。しかし、この描写で何より注目すべきなのは、帽子が文明社会を象徴していることよりも、語り手の意識に死への志向が充満して

いる点である。厭世的になり、“coffin warehouses”の前で足を止めたり、“the rear of every funeral”に同行している時は、海へ行くべきなのだ、という描写から、そのことは窺えよう。語り手の中で、帽子の落下は、棺桶や葬列といった死の表象と同列に扱われているのである。第1章においてすでに、帽子の落下は死のベクトルに向けられていると言えよう。そして、死の表象たる帽子の落下運動は、物語の進展とともに反復され、最終的に、帽子そのものと化した Ahab そのひとの動作になっていく。Ahab は縄に絡め捕られ海へと落下するが、そうした Ahab の死に様を、緑の垂れた帽子が予兆的に伝えているのだ。

第51章で、Ahab の帽子が“the unremoved hat”と言い表されていることから明らかなように (235)、Ahab は船長室での就寝中でさえ、その帽子を脱ぎはしない。それゆえに、“unremoved”であるはずのその帽子が、第130章において、かの鷹に奪われることはすぐれて示唆的である。のみならず、永遠に失われたはずのその帽子が Ahab の頭上に描かれ続けることもまた、前言の翻しに次ぐ翻しとなって読者を惑わせるが、それはしかし、読者の意識を Ahab の帽子とその落下運動へ向けようとする、作者 Melville が仕掛けたひとつの戦略的矛盾なのである。

註

1 Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. The Northwestern-Newberry Edition, edited by Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Northwestern UP and the Newberry Library, 1988), 130. 以下、当作品からの引用は全て同版により、本文中の括弧内に頁数のみを記す。

2 国際著作権法との兼ね合いゆえに、*Moby-Dick*には2つの版が存在する。米国版は、Melville が書き、彼の家族が清書した原稿をもとに活字にされ、英国版は、その校正刷りをもとに Melville 自身の修正と出版社側の検閲を経たのちに活字となった。それゆえ、両版には夥しい数の相違が見受けられる。第130章“The Hat”においても、そのような両版の異同は見られ、Melville の修正を受けた英国版では、この章の (Ahab が Tarquin と比較される) 最終段落がまるごと削除されている。この異同について、Longman 版 *Moby-Dick* の編者 John Bryant と Haskell Springer は、この段落が政治的・性的・宗教的理由で削除されたとは考えられまいとし、おそらくは印刷業者が印刷の段階でこの段落のみを

抜かしてしまったか、あるいは、Ahabにまつわる予兆が過多にならないようにMelville自身が削除したのだらうと推測している(Bryant and Springer 471)。もしMelville自身がこの段落を削除したのであれば、ここで確認しておきたいのは、英国版においてMelvilleは、AhabがTarquinと比較される最終段落は削除したものの、(そのひとつ前の)Ahabの帽子が鷹に奪われる段落は削除していない点である。それはすなわち、Ahabの帽子が奪われるくだりをMelvilleが再読したうえで推敲したことを意味する。そのように考えるならば、帽子にまつわる矛盾に、Melville自身が気付いていなかった可能性は極めて低いと言えるだろう。

3 *Moby-Dick*においてMelvilleは、“slouch”の語を都合10回使用しているが、Melvilleの他の長編小説と比較すると、この使用頻度は極めて高い。この語は、*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas* (1847), *White-Jacket; or, The World in a Man-of-War* (1850), *Pierre: or, The Ambiguities* (1852)ではそれぞれ1回ずつ、*Mardi: and a Voyage Thither* (1849)の中で2回、*Redburn: His First Voyage* (1849)においては3回用いられているに過ぎない。そのことを考慮しても、*Moby-Dick*でのこの語の多用は、実に示唆的である。

Works Cited

- Beaver, Harold. “Commentary.” *Moby-Dick; or, The Whale*, edited by Beaver, Penguin, 1986, pp. 689–967.
- Bryant, John, and Haskell Springer. “Revision Narrative.” *Moby-Dick*, edited by Bryant and Springer, Pearson Longman, 2007, p. 471.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. Doubleday, 1957.
- Finkelstein, Dorothee Metlitsky. *Melville’s Orienda*. Yale UP, 1961.
- Forster, E. M. *Aspects of the Novel*. Hodder & Stoughton, 1993.
- Hayford, Harrison. “Unnecessary Duplicates: A Key to the Writing of *Moby-Dick*.” *Melville’s Prisoners*, Northwestern UP, 2003, pp. 39–63.
- , Hershell Parker, and G. Thomas Tanselle. “Editorial Appendix.” *Moby-Dick; or, The Whale*, edited by Hayford, Parker, and Tanselle, Northwestern UP and the Newberry Library, 1988, pp. 575–906.
- Irey, Eugene F. *A Concordance to Herman Melville’s Moby-Dick*. Garland Publishing, 1982. 2 vols.
- Levin, Harry. *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe, Melville*. Faber and Faber, 1958.

14 小南 悠

- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. Oxford UP, 1941.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. The Northwestern-Newberry Edition, edited by Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern UP and the Newberry Library, 1988.
- Rathbun, John W. "Moby-Dick: Ishmael's Fiction of Ahab's Romantic Insurgency." *Modern Language Studies*, vol. 21, no. 3, 1991, pp. 3-9.
- Robillard, Douglas. *Melville and the Visual Arts: Ionian Form, Venetian Tint*. Kent State UP, 1997.
- Vincent, Howard P. *The Trying-Out of Moby-Dick*. Southern Illinois UP, 1949.
- Williams, David Park. "Hook and Ahab: Barrie's Strange Satire on Melville." *PMLA*, vol. 80, no. 5, 1965, pp. 483-88.
- 内村理奈『モードの身体史』, 悠書館, 2013年.
- 坂下昇「訳註」『メルヴィル全集 8 白鯨』坂下訳, 下巻, 国書刊行会, 1983年, 300-27頁.
- 酒本雅之『沙漠の海——メルヴィルを読む』, 研究社, 1985年.
- . 「メルヴィル演習(1)——*Moby-Dick*を中軸に——」『英語青年』第129巻, 第5号, 1983年, 221-23頁.
- 牧野有通「逆説としての鎖国——『タイピー』に浮かび上がる『近代』」『変容するアメリカ研究のいま』小林憲二編, 彩流社, 2007年, 151-64頁.

SYNOPSIS

Yu KOMINAMI

The Slouched Hat: The Representation of Hats in *Moby-Dick*

In Herman Melville's *Moby-Dick* (1851), words denoting headwear such as "tarpaulin," "cap," and "hat" occur repeatedly. Since Melville seldom describes characters' clothes in his works, the recurrence of these items in *Moby-Dick* appears all the more striking, especially with regard to Captain Ahab's hat, although this is an aspect that has so far escaped critical attention. This paper discusses the references to hats in *Moby-Dick*, giving attention to one particular discrepancy, and aims to elucidate what effect they add to the work.

In *Moby-Dick*, Ahab is frequently depicted wearing a hat, which is often modified by the word "slouch." For instance, Ahab paces the planks with his "slouched hat" in Chapter 30, and his eyes are hidden beneath "that slouching hat" in Chapter 130. At the end, his hat is snatched from him and dropped into the sea by a hawk in Chapter 130, and as the narrator explains, "Ahab's hat was never restored." It is remarkable, therefore, that Ahab is seen again with his hat on in Chapters 132 and 133 as if nothing has happened, though his hat should have been lost forever in Chapter 130. These references to the "restored" hat are a clear discrepancy, and unlikely to be due to an oversight of the author, who consciously describes Ahab's hat as a "slouch" hat. The purpose of the discrepancy, therefore, may be to make the reader subliminally conscious of the dropping of the hat in Chapter 130, or in other words it raises the expectation that the returned hat will fall into the sea once again when it reappears in Chapters 132 and 133. This discrepancy seems to be intentional on the part of Melville.

Moreover, although the word "slouch" repeatedly qualifies Ahab's hat in *Moby-Dick*, only once is it used to describe Ahab himself, namely in Chapter 134, where

“slouched Ahab stood fixed within his scuttle.” Because the word “slouch” almost always refers to the hat, we may be being led to suppose that Ahab is himself depicted as a hat in this scene, and that perhaps he will be the next to fall into the sea like his dropped hat.

As several critics have observed, *Moby-Dick* has a typological structure in which a series of predictions and prophecies accumulate around the character of Ahab. On the basis of this typological structure, we can suppose that the motion of dropping, as a prophecy, is also transferred from the slouched hat to Ahab himself, and the repeated descriptions of Ahab’s slouched hat express such a mechanism of psychological transference in *Moby-Dick*.